

欲望の輸出—ポー作品とセクシャリティ

高野泰志

エドガー・アラン・ポーは、少数の例外を除いてアメリカを描かなかった作家である。特に生涯にわたってとりつかれたように描き続けた女性の死は、そのほとんどが異国、しばしばヨーロッパを舞台に描かれている。ここでは特に、パリを舞台としているデュパンものの推理小説を取り上げ、なぜそこに描かれる殺人がヨーロッパに「輸出」されなければならなかったかを考えみたい¹。

ポーは生涯を通じて何度も美女の死や復活を描き続けたが、それら女性の死と復活の表象は、ポーのコントロールできない／されなければならない性欲を描いたものであると考えられる。ポーは自らの性欲を誘い出す女性のセクシャリティに恐怖していたのである。そのためにポーの作品では、生きながら埋葬したはずの性欲がしばしばよみがえる。ポーが作り出したとされる推理小説という小説ジャンルは、実はこの何度もよみがえる不合理的な欲望を囲い込むために生み出された小説形式なのである。

「モルグ街の殺人」においては、そもそも事件が起こる前は男性だけの世界と女性だけの世界がきわめて明確に分け隔てられている。デュパンと語り手の、男だけの隠遁生活はしばしばホモセクシャルを思わせることが指摘されてきたが²、事件の被害者となるレスパネー母娘もまた、自分たち女性だけで「きわめて世間から交渉を絶った生活」(191)を送っていると書かれる。その分け隔てられた世界に突如侵入するのがオランウータンなのであるが、この猿が性欲の表象であることは明らかであろう。狭い煙突に無理矢理女性の身体を押し込むというレイプを思わせる行動だけでなく、オランウータンがそもそも逆上するきっかけになるのはレスパネー夫人が梳いていた髪の毛であり、また自分が切り裂いた傷口から流れる血であった。髪が女性性の象徴であることはもちろん、流れ出る血は女性の身体性とセクシュアリティを強烈に指し示している。いわばこのオランウータンは、ポーの語り手たちが抑圧しようとしていた性欲の象徴であり、性欲に回帰した男が、性と身体を持つ女性を攻撃しているのである。したがってこの作品において見つけだされるべき真犯人とは、実は多くの作品でポーの語り手たちが隠し、抑圧していた性欲であるということも可能だろう。

ポーはこの抑圧しても監禁状態から抜け出し、暴れ回る性欲を、捕らえ、再び閉じ込めて飼い慣らす必要を感じていたのである。デュパンの推理能力は、つきまとう不合理的な欲望を合理性で説明するためのものと考えられるだろう。あれほど頻繁に天邪鬼を描いたポーであるが、デュパンは人間の行動を徹頭徹尾合理的に説明し、未来の行動の予想までしてしまう。もちろんこのような合理性は、デュパンだけが持っていたわけではなく、「暗号論」などを見ても分かるように、ポー自身の傾向でもあった。ポー自身が合理的にすべてを解決しようとする傾向にありながら、天邪鬼にとりつかれるという矛盾を抱えていたのである。

ポーはこの不合理的な欲望を理性で囲い込むだけでなく、自国アメリカを遠く離れたパリに「輸出」した。これは「美女の死」を描いた一連の作品（「モレラ」「ベレニス」「ライジーア」など）がすべてアメリカ国外を舞台とする一方、女性のセクシャリティが登場せず、理性による推理のみを題材とする「黄金虫」が珍しくアメリカを舞台にしていることも、この点から説明ができる³。いわば女性のセクシャリティとの戦いは、「ここではない場所」に排除されなければならなかったのである。

デュパンものの第2作「マリー・ロジェの謎」が、実際の事件メアリ・シンシア・ロジ

ヤーズ殺しをほぼ忠実に扱い、未解決の事件の真相を解き明かそうとした作品であることは広く知られているが、この作品があえてデュパン「モルグ街の殺人」の続編として書かれなければならない理由は、第1作の評判が高かったからと言うよりはむしろ、メアリの死そのもののはらむセクシャリティをパリに「輸出」しなければならなかったことに求められるのではないだろうか。未解決事件を雑誌紙上で解決するという意図を最大限効果的にするためには、あえてデュパンものとして人名と地名を書き換えるよりはむしろ、そのまま実際の固有名詞を使った方がはるかに大きなメリットがあったはずである。

「輸出」前のメアリ・ロジャーズ殺人事件と、「輸出」後の「マリー・ロジェの謎」を比較し、加えられた変更点を見てみると、本人は意識していなかったにせよ、ポーが「輸出」をする際に何を隠蔽しなければならなかったのかがはっきりと立ち現れてくる。ポーは、作品中で海軍士官と駆け落ちしたマリーがその途中で口論の結果殺害されたと推理した。『レイディーズ・コンパニオン』誌に3回に分けて掲載される予定であったが、11月号と12月号に2回分を載せた段階で真相が発覚し、実はメアリは墮胎手術に失敗して死亡し、遺体を遺棄されていたことが判明したのである。ポーは最終部分の原稿の掲載を1ヶ月遅らせ、真相を知った上で2月号に修正した原稿を掲載した。

ジョン・ウォルシュがこのメアリ・ロジャーズ事件に関して詳しく記述しているが、そもそも当時の新聞には、メアリの行方不明が報じられた直後から墮胎手術を受けているのではないかという説が掲載されていた (Walsh 24) 4。ポーは「マリー・ロジェ」を執筆するにあたって、当時の実際の新聞記事をほぼそのまま収録しているが、おびただしい量の新聞紙上の意見に対してデュパンに反論させているにもかかわらず、この墮胎に関する記事には一切触れていない。またメアリは事件の数年前にたばこ屋で男性客を惹きつけるための店員として雇われていた。これもディヴィッド・ヴァン・リアによれば、当時のメアリの役割は売春婦に近いものだったようである (Van Leer 85-86)。だからこそメアリは何度も墮胎を繰り返さなければならなかったのである。実際に当時同じ町に住んでいた経験のあるポーは、当然このような事実を知っていたはずなのだが、ポーは作中でマリーのことを「卑しい女性ではなかった」(223)と述べている。タバコ屋の主人アンダーソンは作中では香水店のルブランとして描かれているが、トマス・マボットが示唆し、後にマシュー・パールが明らかにした事実によると、ポーにメアリ・ロジャーズ事件のことを書くよう依頼したのはアンダーソンであった (Mabbott 722, Pearl xvi-xviii)。アンダーソンは自分に不名誉な噂を立てられることを恐れ、ポーに自分を事件とは無関係な人物として描くように頼んだというのである。そういう意味ではアンダーソンのもとでメアリの従事していた売春行為について、ポーが触れなかったのはむしろ当然のことに思えるかもしれない。しかしヴァン・リアが詳細に論ずるように、ルブランとマリーが売春業と関係していたことの痕跡は、ポーのテキストから決して隠されているわけではない (Van Leer 85-86)。ここからもポーはメアリ／マリーの売春行為を目の前にしながら気づいていないように思える。無残にレイプされた死体を描くことはできても、売春婦として男を誘い、墮胎を繰り返す女性であるとは書けなかったのである。

ポーは作品中でこれらの事実を見ることを拒否し、隠蔽することにしたのである。いわばポーはマリーを誘う女ではなく、被害者として描くことで、そしてデュパンにそう推理させることで、誘う女としての脅威を消去しながら、彼女を抹殺しようとした。しかしこの推理は事件に関わった人物の証言で誤りであることが暴露される。結局ポーはこの隠蔽工作に失敗し、原稿に「墮胎」の文字を差し挟まざるを得なくなるのである。これは偶然の成り行きに過ぎないが、隠蔽された性の問題がその抑圧を越えて浮上してくる様子を見ると、この作品の創作過程自体がまるで一連のポーの作品そのものと重なってくるようである。

真相を究明するという意味でも、作品の完成度という点からも、この「マリー・ロジェの謎」はまぎれもない失敗作である。しかしこの作品の失敗そのものが、欲望しながらもその欲望を拒否し、抑圧しようとしながらも失敗し続けるポー文学の本質を何より雄弁に物語っていると言えるのではないだろうか。そしてポーの生涯にわたる、女性のセクシャリティとの戦いは、常にヨーロッパという「ここではない場所」で戦われなければならなかった。失敗作であるがゆえに、「マリー・ロジェの謎」はポーが企てた「セクシャリティの輸出」のメカニズムをはっきりと暴露してしまっているのである。

Notes

- 1 デュパンを主人公とする推理小説の第3作「盗まれた手紙」は女性のセクシャリティとの関わりでは非常に重要な作品であると言えるが、殺人を描いていないので、ここでは扱わない。
- 2 たとえば Van Leer 79 を参照。
- 3 最晩年に書かれた「黒猫」はその珍しい例外と言える。
- 4 すでにこれ以前にもメアリは一度失踪しており、その際も実は当時のタバコ屋の雇い主アンダーソンの計らいで1度目の墮胎をしていたことが明らかになっている。

Works Cited

- Pearl, Matthew. "Introduction." *Murders in the Rue Morgue: The Dupin Tales*. New York: Modern Library, 2006. ix-xix.
- . *Collected Works of Edgar Allan Poe*. Vol. 2. Ed. Thomas Ollive Mabbott. Cambridge: Harvard UP, 1978.
- . *The Short Fiction of Edgar Allan Poe: An Annotated Edition*. Ed. Stuart Levine and Susan Levine. Urbana: U of Illinois P, 1976.
- Van Leer, David. "Detecting Truth: The World of the Dupin Tales." *New Essays on Poe's Major Tales*. Ed. Kenneth Silverman. Cambridge: Cambridge UP, 1993. 65-91.
- Walsh, John. *Poe the Detective: The Curious Circumstances behind the Mystery of Marie Rogêt*. New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 1968.